

パルデア仲良しカル
テット！

はっぽーしゅ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハルト（主人公）とネモ、ペパー、ボタンの、楽しい日常の1ページ。

※ポケモンSVクリア後の回覧推奨です

※ハルトの人格（ゆる系シヨタ）と手持ちポケモン（新ポケ4＋既ポケ2）は完全に作者の捏造です（名前と見た目がデフォルトなだけでほぼオリ主）

※バイオレット版準拠です

目次

パールデア仲良しカルテット！	—	1
ペパーとハルトの美味しい金曜日！		
20		
カルテットとカレーライス！前編		
31		
カルテットとカレーライス！中編		
40		
カルテットとカレーライス！後編		
58		

パルデア仲良しカルテット！

宝探しの旅に最強大会と大忙しな毎日から、少しだけ落ち着きを取り戻したある日のグレープアカデミー。

ポケモントレーナーの少年ハルトは、アカデミーが有する広々とした校庭の一角で、大好きな手持ちポケモンたちとひとときの触れ合いを楽しんでいた。

今の時間は昼休み。生徒たちは皆、各々の形で授業に疲れた心身をリフレッシュしている。ポケモンが大好きなハルトは、愛する手持ちたちとのんびり過ごす事で昼休みを堪能していた。

「フイ〜」

「よしよし」

「マニャーニャ」

「あはは。順番順番、順番ね」

「キュウ〜…」

「イルくんおねむ？いいよ、おやすみ」

暖かく柔らかな芝生に、ゆったりと脚を伸ばして座るハルト。

膝の上にエーファイが寝そべり、ヤキモチを妬いたマスカーニヤが僕も僕もと首元に絡みつく。隣にはナイーブフォルムのイルカマンがピツタリと寄り添い、ハルトの腰に顔を押し当てながらウトウトと真昼の陽気に微睡んでいる。甘えん坊のオストリオは、今日も今日とてハルトにべつたりだ。

「ボウ、ボウ」

「キイー」

「クワンヌ」

そんな彼らに少々呆れた眼を向けているのは、ソウブレイズ、タイカイデン、ルカリオたち女の子組。

大人びた性格の彼女たちは、オス団子と化したハルトたちの隣にゆるりと座りながら、のんびりとガールズトークに興じている。

「ギャオ」

そして最後に、校庭に迷い込んだヒラヒナと一人気ままに戯れているミライドン。きつとこの後すぐに遊び飽きて、ハルトの顔をペろりとひと舐めしてから呑気に昼寝を始めるのだろう。遠い未来から来たミライドンは、現代の誰よりも自由でお気楽なのだ。

「くあ…」

自分にくつついて離れない甘えたさんたちの体温に眠気を誘われ、ハルトは小さく欠伸を漏らした。

あつたかいな、気持ちいいな。このままお昼寝しちやおうかな。

そうして眠気に身を委ねて、エーフィを抱き枕に、マスカーニヤを掛け布団にしながらコロリと芝生に寝そべったその時。

「おきろー!」

澆刺とした少女が、ハルトの小さな顔を覗き込みながらハイパーボイスの様な大声をあげた。

「わっ!?!」

「フイーツ!」

「ハニヤ」

「Z z z z …」

驚いたハルトはビクツと大きく体を跳ねさせ、エーフィは悲鳴をあげながらハルトから跳びのいた。マスカーニヤは気に留める事なくハルトに頬擦りを続け、イルカマンはすやすや寝息をたてている。

「フーツ、フーツ!」

「キィ?」

タイカイデンの柔らかなお腹の下に逃げ込んだエーフィが、薄紫の体毛を逆立てながら声の主を必死に睨みつける。ハルトのエーフィはちよっぴり臆病なのだ。

「おはよー!」

声の主は、黒い長髪をポニーテールにした、スラリとした体躯の健康的な少女。

ハルトのクラスメイト兼ライバル兼親友の、ポケモン勝負大好きガール、ネモだ。

「びつくりしたあ…」

「もおーハルトひどいよ! 昼休みは私と勝負する約束でしょ!」

「だってネモ、生徒会の仕事忘れてたー! って勝手にどっか行っちゃうんだもん。お昼

ご飯あんなに残しちやってさ、あれ僕とペパーで残りぜんぶ食べたんだよ?」

「ボタンは?」

『『いやいらんし』って。僕もう眠いよ、お腹いっぱいだもん。ふわあ…おやすみい…』

「あつ!」

いつもなら笑顔で快諾するネモとのポケモン勝負だが、今のハルトはすっかりお昼寝モード。

「ねえー起きてよー勝負してよー!」

「んー…またほーかごねえ…すう…」

「むうう！あ、ねえねえニヤオくん、ハルトおこして？」

「ニヤフンツ」

「そつぽむいた!?!」

全くやる気の無いハルトとその相棒に、必死で縋りつくネモ。

ネモにとってハルトは、チャンピオンである自分が唯一全力を出して戦う事が出来る貴重な好敵手。どんなに短い時間だろうと、勝負の機会は絶対に失いたくないのだ。

「うー、うーっ！」

「ボウ」

「カルちゃん?」

バトル欲が抑えきれず半泣きになっているネモの肩に、ハルトのソウブレイズ、カルちゃん（カルボウの女の子だからカルちゃんである）が、そつと短剣形態の右手を添えた。

「ボウ、ボウボウ」

「え、戦らせてくれるの!?!」

「ボウ」

「やったー！カルちゃん大好きー！」

「ボウン」

ポケモンからのまさかの申し出に、闘志を持って余したネモは大喜び。そんな無邪気な少女を、ソウブレイズは穏やかな眼差しで見やった。カルちゃんは優しい女の子なのだ。

「よし、それじゃ戦ろ戦ろ! 1 on 1でいいよね! ちようどパーモットが貴女と戦りたがってなんだ! 真剣勝負ならぬ真拳勝負、なーんて…」

「おいこら生徒会長! なぁにヒトのポケモンと勝手にバトロうとしてんだ!」

「あ、ペパー!」

おおはしやぎのネモを遮る様に現れたのは、クセつ毛気味のブロンドヘアを肩まで伸ばした大柄な少年、ペパーだ。

「勝手にじゃないよ、カルちゃんがいいよって言ったの! ねーカルちゃん?」

「そうなのか? カルちゃん」

「ボウ」

「そうかそうか! カルちゃんは優しい良い子ちゃんだな!」

「ボウ…」

おおらかな笑顔で褒めちぎるペパーに、ソウブレイズは恥ずかしそうにもじもじと尖った剣先を擦り合わせた。照れ屋さんである。

「…つてそれでもダメだろ! 勝負するならちゃんとハルトの許可とれ許可!」

笑顔から一転、再びガーッと吠えるペパー。ネモはぶすつと唇を尖らせた。

「だってハルト起きないんだもん！」

「しょうがないだろお腹いっぱいちゃんだから！放課後まで我慢しなさい！」

「やだ！」

「やだじゃない！」

「やだつたらやだ！」

「ワガママちゃんめ！」

スヤスヤ眠るハルトの側で、ギャーギャー吠え合うネモとペパー。

以前のネモであれば大人しく引き下がったかもしれないが、最近は少々ブレーキが壊れ気味だ。

「全く、勝負の味をしめやがって。生徒会長の姿かそれが？」

「むっ…じゃあ、ペパーが代わりに戦らせてくれるなら我慢するけど？」

「やだよ、キズぐすり代で食材買えなくなるだろ」

「なにそれ!？」

「そんだけアブナイってこと！さくハルトくゆつくり寝ようなくハルトはガリガリちゃんだからなく食べて寝ておつきくなろうなく」

「なんかあやしてるし！」

引き下がらないネモを放置して、ハルトの頭を撫ではじめるペパー。熟睡中のハルトは気持ちよさそうにふにやりと笑った。

「んん…ふへえ…ペぱあ…」

「はは、寝てても俺がわかっちゃまうか!さすが親ゆ」

「ニヤツ!」

「あいてっ!?!」

ハルトを撫でる大きな手を、ハルトと絶賛添い寝中のマスカーニヤがペシッと叩いた。

「なんだあニヤオくん、ヤキモチちゃんか?」

「ニヤフンツ」

「わかったわかった、お前に譲るよ」

「ハニヤーニヤ♪」

ペパーが手を引つ込めると、マスカーニヤは機嫌を直してハルトへの頬擦りを再会した。

ハルトのマスカーニヤ、ニヤオくんはニヤオハ時代からヤキモチ焼きの甘えん坊だったが、最終進化後は更にワガママになっていた。高まった身体能力と比例する様に、独占欲までシビルドン登りである。

「クワンヌ」

そんなワガママ放題の我らがエースポケモンに、ルカリオのリオちゃんは呆れた様のため息を吐いた。

鋼のクールビューティーな彼女は、ソウブレイズやタイカイデンほど世話好きではないのである。

「ほらネモ、見ろよこの幸せそうな寝姿。尊いだろ？」

「う、うん…」

ひとつオチがついたところで、ペパーは説得フェイズに入った。

わざとらしく切なげな顔をしながら、狼狽するネモをきゆるくんと見上げる。

「こんなに美しいヒトとポケモンの営みを、お前は壊しちまうのか…？そんな事をハルトに…するのよ…？」

「ぐぬぬ…！」

ペパーの つぶらなひとみ！

こっちはばつぐんだ！

「で、でもでも！カルちゃんは戦らせてくれるって！」

ネモの わるあがき！

「ボ、ボウ？」

「カルちゃんは優しいからな。ネモを氣遣って自らを犠牲にしようとしてるんだ。なあカルちゃん?」

「ボウ!?ボウボウ!」

カルちゃんは こんらんしている!

「ちがうよねカルちゃん!?カルちゃんは勝負したいもんね!」

「ボウツ!」

「無理するなカルちゃん、俺は分かっている。ホントはカルちゃんもハルトと寝たいんだろ…?」

「ボボウツ!」

スヤスヤ眠るハルトの傍ら、無駄に可愛らしいつぶらなひとみを披露するペパーと、半泣きで抵抗を続けるネモ。そしてそんな二人の間でオロオロキョロキョロするソウブレイズ。

「いやなんぞアレ……」

そんなカオスな集団を、少し離れたところから引き気味に見やる少女がいた。

もつふもふのイーブイバッグを背負った、短髪眼鏡なパーカー女子、ボタンである。

「完全に陽キャのコントじゃん…近付かんどこ…」

この少女、ボタンもまたハルトたちの親友の一人であったが、元来控えめな性分の為

ああいった陽気溢れる雰囲気から飛び込むのは得意ではない。

後でハルトから経緯だけ軽く聞こう、と考え、そろりと静かにその場を発とうとするが、そんな彼女を目ざとく見つける者がいた。

「ギャオツス！」

「うげっ!?!」

ミライドンだ。いつの間にか背後に迫っていたミライドンが、わつと前脚を広げてポタンに抱きつき、押し倒した。

「アギヤ、ギヤス！」

「わっ、ちよっ、やめれっ!?!」

「ギャオ〜ン！」

「ああああああ……!」

芝生に組み伏せられたまま、ペロペロと顔中を舐めまわされる。ずり落ちた眼鏡を直す事すら出来ず、情けない悲鳴を校庭に響かせてしまう。

「あ、ポタンお昼ぶり!?! っていうか、ぷふふっ……大丈夫? 起きれる? ポケモン勝負する?」

「しないしってか助けろし! なんでこの状況で勝負なんだよネモすぎんだろ!」

「二人とも相変わらず仲良しちゃんだな! これからもコイツの事よろしくな、ポタン!」

「いや良い話風にすんなし! つてかなんで毎回うちだけこんなになるんだよ 躰はどうなってるんだ 躰は!」

駆け寄ってきたネモとペパーが、ボタンとミライドンのわちゃわちゃ具合にくすくすと笑う。ボタンはひーひー言いながら身を振る事しか出来ない。

「ギャオツス!」

「ギャオツスじゃないが!?!」

大好きなボタンとの濃密なスキンシップに、ミライドンはご満悦で元気に鳴いた。ボタンは泣いた。

「フイー、フイー!」

「ハツ、ブイキゅん!?!」

とそこに、もう一匹のボタン大好きっ子が現れた。

「フイー、フイー、エ〜フイー♪」

ハルトのエー、フイー、ブイクンである。

ボタンはイー、ブイとその進化系が大好きな生粋のブイブイファンで、手持ちポケモン全てがブイブイという筋金入り。当然ハルトのエー、フイーにもメロメロだ。

そしてエー、フイーもまた、ブイブイたちの匂いが染みついたボタンが大好きなのである。

「フイ〜♪」

「はあああブイきゅんほんまネ申…」

「呼んだ？」

「呼んでない」

ミライドンに押し倒されつつも、擦り寄ってきたエーフィをぎゅつと抱き寄せて顔を押し当てるボタン。

「すうー、はあー。すうー、はあー」

「…なに吸ってんだお前？」

「お前言うなし。ブイブイは吸うものだから。すうー…」

「なっ…それはつまり、エーフィはスパイスだった…ってコト!？」

「うん、ちがうと思うな！」

界限特有の謎文化に慄くペパーと、シンプルにツツコむネモ。ミライドンは満足してボタンに乗ったまま昼寝をはじめた。

「ふわあ〜…んん〜…う？」

と、そこでハルトが目を覚ました。首元に絡みつくマスカーニヤをそのままに、むつくりと上体を起こして賑やかな一団に目を向ける。

「あれえ、みんななに…」

「ボウ…」

「カルちゃん？なんかお疲れだね？」

「クワンヌ」

「リオちゃんも…ああ、あはは、そゆことかあ」

ルカリオが放つ気怠げな波導を感じとり、ハルトは幼なげな相貌をふにやりと崩した。

「ニヤオくん」

「ハニヤ？」

「イルくん」

「Zzzzzz…キユウ…？」

「カイちゃん」

「キイー？」

ハルトは寝ぼけ眼のイルカマンを抱っこして、首にマスカーニヤを巻きつけたままよいしょと起きあがった。華奢な見た目に反して中々の怪力である。

起きあがった愛するパートナーの傍らに、翼を畳んだタイカイデン、カイちゃんがぴよんぴよんと跳び寄る。

ハルトが空いている左手で喉元の電気袋をやわやわと撫でると、タイカイデンは嬉し

そうにキイーっと鳴いた。彼女は甘やかし上手の世話好きつ娘だが、同じくらい甘えるのも大好きなのだ。

「ボウ」

「クワンヌ」

そんな彼らに、ソウブレイズとルカリオがため息混じりに寄り添う。気疲れした様子のソウブレイズとどこまでも気怠るようなルカリオに、ハルトはあははと苦笑した。

「つてか重い！離れろし！」

「ギヤオスウ…Z z z z…」

「うわ、マジ寝じゃん！本能全振りトカゲかよ!？」

「ミライドンお前なあ、最近ちよつと自由過ぎだぞ？ボタンだからいいけど」

「よくないが!?!なにもよくないが!?!」

「元気出てきたねボタン！じゃあ勝負しよつか！」

「なにがじゃあだよ！なにがじゃあだよ！文脈ドわすれ人間かこのネモツ！」

「エ〜ファイ？」

「ああ〜もおブイキゆんだけが癒しい〜！ハルトお〜助けれ〜！」

押し強い二人と一匹にもみくちやにされているボタンが、へろへろ声で助けを求めている。そのあまりに情けない姿に、ハルトは思わずぶふつと吹き出した。

「ふふっ、あははっーふ、ふ、ふふ…み、みんな？あれ、ぷふふっー！どうしよっか？」
コロコロ笑いながらポケモンたちを見やるハルト。

「ハニヤニヤン♪」

マスカリーニヤはいつでも良さげ。ハルトさえいればいいらしい。

「クア〜…」

ルカリオはもつとどうでも良さげ。左手で口元を隠して欠伸びながら、好きなようにと右手をヒラヒラさせている。

「キィ♪」

タイカイデンは、呆れはしつつも楽しそう。早くエーフィをあやしたいみたい。

「ボウ…」

ソウブレイズはちよっとお疲れ。でもやっぱ優しい娘なので、困っているボタンを助けたみたい。

「イルくんは？」

「……」

最後に、さつきからずうつとハルトに抱きしめられているイルカマンのイルくん。
イルカマンは、ミライドンに押しつぶされているボタンをじっと見つめている。

「……ハッ!？」

そのまん丸な瞳に気づいたボタンは、一縷の望みをかけてゼンリヨクで叫んだ！

「た、助けてー！イルカマー……ン！」

「キュッツツツ！」

瞬間、イルカマンの全身が眩い光に包まれた！

「うわっ、まぶしっ!?!」

助けを求める少女の声に答え、普段の穏やかで可愛い水色のナイーブフォルムから、イルカマンは真の姿へと変身する！

逞しい筋肉に包まれた、紺碧色のぼくらのヒーロー！

「マイッツツツツキュンツ！」

イルカマン・マイティフォルム！

「わあ、イルくんやる気マンマン！」

「キュンツ！」

……が、ハルトに抱っこされたまま覚醒した！

「よおし、みんなでボタンを助けよう！」

「キュンハアツ！」

「ハニャ〜」

「クア〜」

「ボウ……」

「キイー♪」

いまいちやる気にバラつきのある仲間たちに構わず、ハルトの腕の中でオーツ!と拳を掲げるイルカマン。180cmに伸びたイルカマンの巨大を軽々抱き続けるハルトは、やはり中々の怪力である。彼はカントー出身かもしれない。

「いくぞー!」

「キュオオオオオオツ!」

性別も性格もバラバラで、それでもやっぱり仲良しな、大切な宝物たちを引き連れて。ハルトは絡みつくマスカーニヤをマントの様にたなびかせながら、イルカマンを抱えて親友たちの輪に飛び込んでいった!

「ゼンリヨクジェットパアアアアンチ!」

「アギヤツ!」

「フイーツ!」

「うおおおハルトとイルカが突っ込んでくる!」

「きた!イルカきた!これで勝つる!」

「私に任せて!ウエーニバル、インファトオ!」

「いや撃退すんなしー!」

突っ込んできたハルトをペパーがマスカリーニヤごと抱きとめ、腕の中から飛び出したイルカマンが唐突に呼び出されて困惑気味のウエーニバルと相対し。流れてバトルに持ち込んだネモは喜色満面で、助けられるどころか更にカオスになってしまったボタンは涙目。

「アクアステップ！」

「うけとめてこつちもインフアイトだ！」

「おいおい結局バトルかよ!？」

「イルカマーン！がんばえー！」

「ギヤオツスー！」

「だからお前は降りろしっ！」

これが、ハルトたち仲良し四人組のいつもの風景。

毎日の様に繰り返される、騒がしくも平和で日常的な時間。

ハルトたち四人が見つけた、大事な大事な宝物である。

おしまい。

ペパーとハルトの美味しい金曜日!

とある金曜日の夜。グレープアカデミー学生寮、ペパーの部屋にて。

「おまちどうさん!」

「待ってました!」

「bauer!」

ポケモントレーナーの少年ハルトは、ペパーの相棒マファイティフと共に折り畳みテーブルの前にちょこんと座り、ペパーが運んでくる手作り料理にぐうぐうとお腹を鳴らした。

プロの料理人を目指して、日々研鑽を積んでいるペパー。彼のまごころ籠った温かな料理が、ハルトとマファイティフは大好きだった。

「わ、こんなにおっきいの?」

「なんだ、ミガフライ食うのは初めてか?」

今日のメインは、パルデア地方の郷土料理ミガフライ。半島西側の海や湖でよく獲れる、きりはなしポケモンミガルーサの身を豪快に揚げた料理である。

「うん。へえ、こんな肉厚なんだあ。大丈夫？高かったんじゃない？」

「いや、全然だ。ミガルーサの肉はそこら中で獲れるんだよ、アイツらすぐ自分の身を切り離すから」

「あ、なるほど」

桁外れな自己再生能力を持つミガルーサは、頭や骨格、ヒレ以外の身を瞬時に切り離して身軽になり、移動速度と集中力を高めるという風変わりな習性がある。ミガルーサが切り離れた身は、古くからパルデアの人々とポケモンたちを育ててきた地方有数の海の幸なのだ。

「エスパークタイプだし、なんか食べたらず頭良くなりそう」

「お、鋭いな。実際頭に効く栄養がたっぷりちゃんなんだぜ、ミガルーサ」

「そっか、ならうーんといっぱい食べなきゃね！ねーマファイティフ？」

「ワフ」

ハルトに背中を撫でられ、ニイツと凄みのある笑みを浮かべるマファイティフ。名前の通りまるでどこかのマファイアの様だが、性格はとても優しく穏やかなのだ。

「あ、写真写真！冷めないうちに早く撮らなきゃ！」

「おう、バシツと頼むぜ！」

「へい、ロトくん！」

『ケテテ！』

ハルトの声に伝えて、彼のスマホロトムがびよんと飛び出す。ロトムはハルトたち二人とマフィティフ、そして肝心の料理がバランスよく写るアングルを瞬時に見定め、機敏な動きで宙を舞いポジションに着いた。

ハルトは写真撮影、特にセルフイーが大好きな少年で、そんなハルトと旅路を共にしたロトムもまた、すっかりカメラ役が大好きになっていた。

『ケテテ！ケテテテ！』

もつと寄つて寄つて！と小さな身体を揺らすスマホロトムに、くすりと笑うハルト。マスカーニャやミライドンたち7匹と同じく、ロトムもまたハルトの大切な宝物である。

「はい、ガケガニい〜！」

「ワフ〜！」

料理を囲んでい〜つと笑う二人と一匹。ガケガニに因んで、ハルトとペパーはダブルピース。

『ケテテ！』

カシャ！と小気味いいシャッター音が響き、撮り終えたロトムが満足げな様子でハルトの手元に収まる。保存された写真の出来栄に、ハルトはにっこりと笑みを深めた。

「ありがとうロトくん」

『ケテ♪』

「後でみんなに送ろうな」

「うん。あ、あとハイダイさんとオモダカさんにも」

「なんでだ？」

「二人ともミガルーサ手持ちだから。喜ぶかな？」

「おう、絶対やめろ。それよりさあほら、早く食べ食べー！」

「うん！ いただきまーす！」

「バウ！」

パツと手を合わせて、ナイフとフォークを手に取るハルト。

「わあ……！」

サクサクの衣にナイフを入れると、白い湯気とジューシーな香りがふわつと広がる。身を崩さないように慎重に切り分け、最初の一切れをゆつくりと口に運び、ぱくり。

「！」

瞬間、口の中に満ち満ちる、淡白ながらも味わい深い白身魚の旨み。しつかりと下味がつけられた身の絶妙な塩辛さと香ばしさが食欲を刺激し、衣のサクサクと身のホクホク、二つの食感が口内を踊り、弾ける。

あまりの美味しさに、声にならない歓喜の音が、ハルトの喉から溢れ出した。

「んーっ！んーひー！（おいしー！）」

「気に入ったか？」

「うん！うん！」

「へへっ、そうか！」

満面の笑みでフライを頬張るハルトに、ペパーはくすぐったそうに笑った。ハルトが彼の料理が大好きな様に、彼もまたハルトに手料理を振る舞う事が好きだった。

「こんだけ美味そうに食ってくれりゃ、俺も作り甲斐があるつてもんだ。ああもう全く、見てるこつちまで腹ペコになる笑顔だけ、つてな具合である。」

「バウツ、バウツ」

「お前も美味いか？」

「バフツ！」

「おう！いっぱい食えよ！」

ペパーの相棒マファイティフも、小皿に切り分けられたフライを大喜びでパクついている。

「美味しいねーマファイティフ！」

「ワッフ！」

隣に座る小さなハルトと幸せそうに笑い合う大きなマファイティフ。そして、そんな二人を温かな気持ちで眺めている自分。

……家族つて、こんな感じだよな、きつと。

付け合わせのフライドポテトをつまみながら、ペパーは優しい多幸福感にじんわりと浸った。

幼い頃に家を去った母と、エリアゼロの研究で家を空けがちだった父。ペパーにとって真に家族と呼べるのは、小さなオラチフの頃からずっと一緒だった大切な相棒、マファイティフだけだった。

そのマファイティフが酷い大ケガをした時、ペパーは本当に目の前が真っ暗になった。どんな高級なキズぐすりを使っても効果がなく、ポケモンセンターに預けても快復が見込めない。日に日に弱っていく相棒の姿に、キリキリと心を擦り減らす日々が続いた。

大好きなマファイティフが死んでしまう喪失への恐怖と、心の拠り所を失いひとりぼっちになってしまう孤独への恐怖。二つの恐怖に押しつぶされそうになりながら、ペパーは気丈に一人で頑張り続けた。

そうして死に物狂いで治療法を探し、ついに見つけた最後の希望、秘伝スパイス。胡散臭いオカルト本に記された眉唾物の代物だったが、少しでも可能性があるならばと、絶える様な想いで手を伸ばした。

「んー…ポテトもおいしいー!」

…思えば、最初は半分ヤケクソだったかもな、こいつを誘った時も。

ホクホク顔でポテトに舌鼓をうつハルトの、妙に幼くあどけない仕草に、ペパーはなんとも可笑しな気分になった。

こんなになちっちゃくてカワイイちゃんなヤツがポケモン勝負激ツヨなんて、まるでゲームかマンガだな、と。

ポケモン勝負が苦手な自分に寄り添い、共に強大なヌシポケモンと戦ってくれたハルト。類稀なバトルセンスを持つ彼と彼のポケモンたちがいなければ、きっと自分はスパイスを手に出れなかつただろう。マファイティフの命を、救えなかつただろう。

「全く、ハルトはお子ちゃまヒーローちゃんだな」

だから、ペパーにとってハルトという少年は、親友であり、ヒーローなのだ。

「んー?」

「ん、なんでもねえ。ほら、ちゃんとサラダも食べよ?」

「うん!」

「バウ」

色鮮やかなサラダをシャキシヤキと味わうハルトを、隣に座るマファイティフが穏やかな目で見守る。その絵面がなんだか歳の離れた兄弟か父子のようで、ますますペパーは可

笑しくなってしまう。

「ワフ」

マファイティフというポケモンは、外敵に対してはあくタイプらしく苛烈に襲いかかる猛犬と化すが、自分のファミリーに対しては非常に優しく、愛情深く接するポケモンだ。きつとマファイティフもペパーと同じく、ハルトを命の恩人として敬い、愉快で可愛らしい小さな友人として慕い、新たなファミリーの一員として愛してるに違いない。

「へへ…」

…なんか、あつたけえな。マファイティフがいて、ハルトがいて。俺の料理美味そうに食って、俺の前で楽しそうに笑って。

…ずっと、続けばいいな、この感じ。

「んー…」

「バウ…」

「…あん？どうした、二人とも」

食事を進めながらぼんやり考えていると、ハルトとマファイティフがじーつとペパーを見つめていた。

怪訝に思い声をかけるペパー。するとハルトの口から、思いもよらぬ発言が飛び出た。

「なんかペパー、おかあさんみたい」

「…はっ、はあ!」

思わずギョツとするペパーに、ハルトはくすりと悪戯っぽく笑った。

「ペパー気付いてる? ペパーつてき、僕たちがご飯食べてる時、すっごい嬉しそうな目してるんだよ?」

「え」

「ふふ、やつぱり自覚ないんだ: それでね、その時の目がね、なんかそっくりなんだあ、僕のママに」

「マ、ママあ…?」

「ふふ、ふふふっ! あれ、照れてる?」

「なっ、て、照れてなんかねえっ! ってか照れる要素ねえだろ! なんだママつて、なあマフィティフ!」

「パウツ」

「あっ、笑った! 笑いやがったこいつ!」

「あはは! マフィティフ、ペパーママはかわいいね?」

「パウツ!」

「や、やめろ! 俺はママじゃねえ! おかあさんじゃねえっ!」

真つ赤な顔でぶんぶん手を振るペパーと、そんなペパーをニヤニヤ眺めるマフィティフ。そしてそのマフィティフにモフっと抱きつきながら、くすくすと悪戯に笑うハルト。

『…ケテ！』

…カシャッ！

「なっ、おまつ、何撮ってんだ!？」

「ロトくんナーイス！そのままネモとボタンに送って!」

『ケテテッ!』

「おいやめろお！一番送っちゃならねえヤツらだろ!」

「あ、もう返事きた!」ペパー真つ赤!どうしたの!?!」だつて!」

「おい消せ!今すぐ消せ!」

「もう送っちゃったもーん♪あ、ボタンからもきた、”誰得の赤面?もつとフライ写してどうぞ”、だつて。興味なしか、よかったね?」

「いやそれはそれで腹立つなオイ!?!」

「ワフッ」

敏腕カメラマンに照れ顔を激写されあたふたするペパーと、悪戯心満載でおちよくりまくるハルト。

そんな二人を微笑ましく見つめながら、マフィティフは小皿のフライをまた一口、パクツと食べるのだった。

◇

ちなみに。結局ハルトはミガフライの写真をハイダイとオモダカには送らず、大衆グルメを愛するサラリーマン、アオキに送った。

しばらく既読がつかなかったが、夜中ハルトが就寝する直前、ポンと通知が入った。ハルトが寝ぼけ眼をこすりながら画面を見ると、アオキからカビゴンのスタンプと共に、”腹減ったので今日は締めます”とコンビ二弁当の写真が送られてきていた。

「アオキさん……」

今度、焼きおにぎりでも差し入れしよう……

垣間見えた大人の世界の厳しさに小さく身震いしつつ、子どものハルトはすやすやと床につくのだった。

おしまい。

カルテットとカレーライス！前編

ある日の昼休み。ハルトたち四人組はいつもの様に学生食堂に集まり、各々好きなメニューでランチを楽しんでいた。

「げ。ボタンお前、またカレーかよ」

少し遅れて来たボタンが手に持つカレーの皿に、うげつと顔をしかめるペパー。対するボタンは、それが何か？とでも言いたげな顔だ。

「なに、なんかわるい？」

「いや悪かねえけどよ……」

「二日に一回は食べすぎだよねー」

「僕なら飽きちゃうなー」

「ふーん。ウチは飽きないけど」

それだけ言って席についたボタンは、呆れた風な三人に構わず、いそいそとカレーを食べ始めた。

彼ら四人組がよくつるむ様になってしばらく、こうして学生食堂でランチを共にする

事もすつかり当たり前になったが、ボタンはネモの言葉通りほぼ二日に一度、つまり週に二、三回のペースでカレーライスを食べていた。

「むう…」

ボタンの対面に座るペパーは、不満気な面持ちで眉を顰めている。食と健康に人一倍のこだわりを持つ彼は、友人が見せる偏食ぶりにそろそろ我慢の限界らしい。

そんな彼の隣で野菜炒め定食をパクつきながら、ハルトは対面のネモと顔を見合わせ、てくすくすと笑い合った。二人はペパーが時折見せる、妙に保護者じみたお節介焼きが可笑しくて仕方ないのだ。

「まったく、せつかく色んなメニューがあるんだからよ、もつとバランスよく食べよな。

栄養偏るだろうが、ものぐさちゃんめ」

「はいはい耳タコ耳タコ」

「真面目に聞けつての! いいかあ? 俺たちくらいの歳の時こそ毎日の食生活が…」

「ハルトたすけて、オカンがダルい」

「誰がオカンだ!」

「だめだよボタン、ママの言うことちゃんと聞こ?」

「ママじゃねえ!」

「ペパーがお母様ならお父様はハルトですわねー!」

「だからお母様じゃねえ！エセお嬢様語で悪ノリすんなモノホンお嬢様！」

「あはは、まあそうカツカしないでよ母さんや」

「そうそう、血圧上がるよオカン」

「ストレス発散にはポケモン勝負ですわお母様！」

「く、くそダメだ……こいつら全員ポケポケちゃんだ……ツツコミが俺しか居ねえ……ッ！」

雑なノリでポケ倒す三人に、ガックリと項垂れるペパー。そんなペパーの姿にひとしきり笑つてから、ネモは自分の隣に座るボタンにフオークを差し出した。

「はい野菜あーん」

「あー……ロールキャベツは野菜カウントでいいんか？」

「え、野菜でしょ。キャベツ巻いてるもん」

「ん、じゃあカレーも野菜か。野菜入ってるし。完全食きたなコレ」

「……なあハルト、女の子つてもつところ、カロリーとか栄養価とか気にするもんなんじゃないのか……？コイツらコレでいいのか……？」

「んー……ふふ、二人ともホシガリスみたいでかわいいなあ……」

「いやどんな目線の褒め言葉だそれ……」

男子が女子に抱く理想を粉々に碎かれゲンナリするペパーは、自分の隣でほっこりと笑うハルトを胡乱な目で見やった。コイツは女の子をちゃんと女の子として認識して

いるのだろうか。まさかホントにポケモンに見えてるんじゃないかなろうかと。

「え、見えてないよ?」

「いや心読むな怖えわ」

訂正、コイツ自身がポケモンちゃんかもしれない。エスパータイプの。

「つていうかさ」

付け合わせのニンジンを中心に放り込みながら、ネモが言った。

「確かにボタンはカレー食べすぎだけど、別に一食くらいいいんじゃない? 三食カ

レーつてワケじゃないんだし」

「それな」

「おう、じゃあ聞くけどよ」

すかさず便乗するボタンに、再びペパーが嘯み付いていく。

「昨日の晩飯は?」

「ポケピザ」

「…その前は?」

「ポケヌードル」

「……っ!!」

つらつと答えるボタンに、ペパーのこめかみがピクピクと痙攣していく。

「じゃあその前は!？」

「え、なんだっけ」

はて?とボタンが首を傾げると、

「満足ナゲットじゃない?ほらコレ」

ハルトがスマホを取り出し、三日前にボタンから送られてきた山盛りの『満足ナゲット』の写真をボタンに見せた。

「あーその写真!ヤヤコマートでセールだったから爆買したっか」ってヤツだ!」

写真を指差して可笑しそうに笑うネモ。写真には、大きな皿を6匹のブイブイたちがぐるりと囲み、ヨダレを垂らしながらおすわりしている様子が写されていた。

「あ、ソレか」

「あはは、僕一瞬で保存したもんコレ」

「インパクトすごいよねー」

「つていうかりーフィアも食べるんだね」

「あの子は光合成より食べる方が好きなんよ」

「へえ、変わった子」

「お前らなあ……!」

本題を忘れてキャツキャと盛り上がる三人組に、ペパーの怒りのボルテージがあがつ

ていくー!

「ええい、やめろやめろ和気藹々と!おいボタンッ!この大バカちゃんが!」

「は?何急に。てか指差すなし」

ビシッと差した人差し指を払いのけられた事にも構わず、ペパーは吠えた。

「お前の食生活はダメダメちゃん過ぎる!毎日毎日エネルギー過多なメニューばかりで、バランスのバの字もねえじゃねえか!」

「エネ過多はロマンだからセーフ」

「誰がポケモンカードの話した!?!」

「ペパーのツツコミって気持ちいいよねえ」

「ボタン相手だとより実るよねえ」

「うるつつさいぞチャンピオンども!ボタン、お前の偏食っぷりにはもう我慢ならねえ!この俺がそのコレステロールに染まった性根を叩き直してやるぜ!」

「はあ?」

「おお〜」

暑苦しくヒートアップしていくペパーに、心底めんどくさそうな目を向けるボタン。ハルトとネモは完全に野次馬モードだ。

勢いで場の流れを掴んだペパーは、瞳を轟々と燃やしながら高らかに宣言した!

「俺と勝負しろボタン！俺が勝つたらお前の昼飯カレーは週一に減ッ！更に晩飯には必ずサラダボウルを追加してもらうぜッ！」

「なっ…」

「おお〜！」

ペパーの熱い戦線布告に、パチパチと拍手するチャンピオンコンビ。ポケモン勝負は苦手だと公言するペパーが、まさか自分から勝負を挑むとは！

対するボタンは、ペパーの圧に一瞬だけ怯んだものの、すぐに気を取り直して肩をすくめた。

「はっ、ばかばかしい、なんでウチがそんな事。つかヒトのご飯にケチつけてくんのダル過ぎだから。カレーとかガラルだったらフツ〜だし。なんなのお前カレーアンチか？」
お得意の毒舌でズバズバと斬り返していくボタン。食事のバランス云々からカレーライスそのものへと論点をズラしていく辺りがなんとも姑息である。

そんなボタンの反撃に、ペパーは真っ向から応戦していく！

「お黙りッ！別にカレーに罪はねえし俺だつてカレーは大好きだ！だがお前のガツタガタな食生活を矯正するにはカレーは毒ッ！お前には好物を我慢し体調を慮る理性と良識が足りねえ！それを俺が矯正してやるってんだよボタン！」

「で、それで勝負しろつて？いやウザいウザいホント無理そーいうの。暑苦しいマッ

チヨ遊びなら他所でやってよ、ネモとかさ」

「ちよつとー?失礼だぞー?」

ぶーぶーと唇を尖らせるネモを横目に、ペパーは新たな手札を切った。

「へっ。いいやボタン、お前は断らねえさ。この勝負だがな、実はお前にはメリットしかないんだぜ?」

「は?なにを…」

「まず、ひとつ!」

訝しむボタンに構わず、ピンツと人差し指を立てるペパー。

「もし俺が負けたら!お前のかわいいちゃんなブイブイたちに毎日!栄養満点の特製ポケモンフードを手作りしてやろう!」

「へ?お、おう…それはまあ、たすかる」

「そして、ふたつ!」

ビシツと中指も立ててVサインを作ったペパーは、そこで誰も予想出来ないまさかの一言を言い放った。

「この勝負…ポケモン勝負ではないツ!!」

「な」

「へ」

カルテットとカレーライス!中編

「ちよつとペパー!?ポケモン勝負じゃないってどういうこと!?!」

勢いよく立ち上がったネモが、斜め向かいのペパーをこの世の終わりの様な絶望顔で問い詰める。あまりに深刻そうなその顔に、ハルトは思わず野菜炒めを吹き出しそうになった。

「よくぞ聞いてくれた!へへっ、みんな俺の作戦が聞きたいかー!」

ペパーはフンスツ!と得意げに胸を張り、特徴的な前髪をサツとかきあげ不敵に笑った。

「いや前置き長いし。本題はよ」

「ボタン、しーっ」

白けた様子で先を急かすボタンを、そつと宥めるハルト。ボタンはハイハイと気怠げに肩をすくめた。

標的のボタンがとりあえず聞く姿勢をとった事を認めたペパーは、コホンと咳払いをしてから自信たっぷりと言い放った。

「いいか？俺は今回ポケモントレーナーとしてじゃなく、料理人としてボタンに勝負を申し込む！」

「料理人として？」

はて？と揃って首をかしげる3人。まるでコダツクの3匹家族である。

「そんなあ、ダメだよペパー」

困った様に眉を顰めたハルトが、ペパーの制服の袖をくいつと摘んだ。

「それじゃあ弱いものイジメになっちゃうよお…」

「は？イジメ？」

「そうだよお…」

泣きそうな顔で、そつとボタンに目を向けるハルト。

「ボタンと料理対決なんて…」

「え？」

突然可哀想な人を見る目で見られたボタンが、なんぞやとハルトを見返す。ハルトはますます泣きそうな顔になった。

「ボタンは…ボタンはね？キッチンが、ピザの空き箱でみっちり埋まって見えなくなっちゃうくらい絶望的な、特性“なまけ”を地で行くアカデミーいちのズボラっ子さんなんだよ…？」

「ちよっ…!?!」

「な、ボ、ボタンお前…」

「ええ…ボタン、それは流石に…」

「ちよっ、ちよい、ちよい待ち。タイムタイムいつかいタイム。っていうか、え、ハルトさん?なんで?なんでいきなり処刑した?」

「恥ずかしい私生活を唐突にぶちまけられたボタンは、オドオドと両目を泳がせた。

「ひくひく口元を引き攣らせながら、突如として公開処刑人と化したハルトを見るボタンの。」

「天然鬼畜少年ハルトは、うるうると両目を潤ませながら更なる追撃を放った。

「グスツ…これがその写真です…」

「んなっ!?!」

「取り出したスマホロトムの画面。そこには、デリバリーピザやインスタント食品のゴミが山と積まれた地獄の様なキッチンをバックに、『ひえっ!』と慄いた顔を作るハルトという、なんとも個性的なセルフイーが写し出されていた。」

「……………」

「そのあまりの地獄っぷりに絶句し、言葉も出ないネモとペパー。ボタンは真つ赤な顔でスマホを引つたくり、瞳をぐるぐるさせながら画面に食い入った。」

「ちよ、ハア!? いつ撮ったんコレ!」

「こないだ遊んだ時、ボタンがトイレ行ってる間にこつそり…」

「こつそり!?! こつそり撮ったんか!?! 女の子の部屋を!」

「だつてすごい光景で…撮らなきゃ! つてなっちゃって…」

「なるなよ! 人ん家だろ! つてか撮るにしても自撮りはアホすぎだし! せめてそこは隠し撮りとかじゃないん!」

「手ぐせで…」

「手ぐせで!」

マトマの实の様な顔でハルトの所業にツツコミまくるボタン。キレ芸に磨きがかかってきた今日この頃である。

そんなボタンに、育ちの良いお嬢様であるネモは信じられないモノを見る様な目を向けてしまう。

「ボタン、その写真ホント…? ヒトが住む部屋じゃないよ…?」

「やっ、ちが…」

「ブイブイたちも可哀想だよ…?」

「うぐうつ!」

本気のトーンで悲しそうに論され、ボタンの良心は大ダメージを受けた。特にブイブ

イたちに対しての部分で。

「…えっと、ね?ペパー、だからね?」

諸悪の根源たる少年ハルトは、写真を見てから固まって動かないペパーにおずおずと向き直った。

「ボタンと料理対決っていうのは、あんまりフェアじゃないんじゃないかなって…」

「…へへっ、こりや腕が鳴るぜ」

「え?」

小さな声で呟くペパーと、キョトンとするハルト。ペパーはニヤリと不敵な笑みを浮かべていた。

「なあ、ボタン」

「げ、オカン…」

ボタンは、ペパーの声にうげっと顔をしかめてしまう。これ以上追い打ち受けたらウチもう死ぬ…という顔である。

だが、続くペパーの言葉は意外にも優しい…というより、あまりに予想外な言葉だった。

「なんか勘違いしてるみたいだけどな、俺は別に料理対決なんてする気はないぜ?」

「「へ?」」

ボタンとネモとハルトは、再びコダック一家と化して首を傾げてしまった。

「さつき料理人として勝負って…」

「ああ、言ったな」

「なのに勝負は料理じゃないの？」

「おう、そうだけハルト」

「あつ、そつか！やつぱりポケモン勝負に変更ってことだね！いいねいいねー、実りあるねー！うわあテンションあがつて——」

「いいやネモ、ポケモン勝負はしない」

「——きたあー！、つて、ええー!?なんでえー!?」

得意気な顔で二人をはぐらかすペパー。ボタンは訝し気に眉を顰めた。

この男、一体ウチにどんな勝負をふっかける気だ？まあハナから律儀に受ける気なんか無いが…

そんなボタンに対し、ペパーはもう何度目か分からない予想外発言を、自信たっぷりな笑顔でおみまいた。

「へへっ！いいか？勝負の内容はめちゃくちゃシンプルちゃんだ。今度の土曜の昼12時！俺がお前に、世界一美味い最強のカレーを食わせてやる！お前はただ、そのカレーを食うだけでいい！」

「……………え?」

思わず目をパチクリさせるボタン。

カレーを食べるだけ、それが勝負…?

「それって……………」

「どんな勝負……………」

不思議そうに顔を見合わせるネモとハルト。ペパーは益々得意気な顔になった。

「つまりだな?」

再びサツと前髪をかきあげ、かぶりをふるペパー。三人は頭にハテナマークを浮かべながら続きを待つ。

不敵な笑みを更に深めながら、揚々とペパーは続けた。

「俺の作ったカレーの美味さに、ボタンがギャフンと言えば俺の勝ち!ボタンの食生活は改善される事になる!」

「おお……………」

「はあ……………」

感嘆の声を上げるチャンピオンコンビと、戸惑い&訝しみしか湧かないボタン。

ギャフン…:ギャフンってなんだ…?

「で、ギャフンと言わなきや俺の負け!」

「おおー！」

「その場合、俺は金輪際ボタンの食生活には口出ししない！」

「おおーッ！」

「更に！俺はペナルティとして、ボタンのもつふもふなブイブイたちに、栄養満点ちゃんな愛情たっぷり出来たてゴハンを、エブリデイご馳走様し続けてやると約束するぜ！」

「おおーッッ！！」

「へへーん！どーだボタン！見事にお前にメリットしかない勝負だろーうー！」

「わあーいパチパチパチパチー！」

ニツコニコで挑戦状を叩きつけてくるペパーと、やんややんやと謎に大喜びなチャンピオンども。なにがパチパチじゃい。ボタンは大きいため息を吐き、水の入ったコップを手を取った。

程よく冷たい水で口と頭をリフレッシュしつつ、ボタンは考える。

要するに、ウチは出されたもんをただ食べればいいだけで…んで、とりあえずどんな味でも『ギヤフン』とだけ言わなきやいい話で…てかマズいワケないよねペパー料理上手だし…

…ん、つまりウチは、休日に美味しいタダ飯食べさせてもらいつつ、ブイブイたちの日々のごはんも確保できる様になってしまふ…あまりにもお得になり過ぎてしまふ…

「ふむ……」

……さてはこれ、アドしかねえな？

ボタンは丸眼鏡を怪しく光らせ、ニヤリと笑った。

「いいだろう、このマジボスが受けてたつ」

ボタンは凄まじいドヤ顔を披露した。既に気分はチエックメイトだ。敗北が知りた
い。

「ようし！じゃあ土曜の昼な！場所は、そうだな……」

ボタンの快諾に大喜びのペパー。彫深い端正な顔立ちを喜色で溢れさせるペパーに、
ボタンはフフフとほくそ笑んだ。勝ちが確定している勝負ほど面白いものは無いのだ。

「はいはい！私の家でやろうよ！裏のビーチでさ、アウトドアっぽく！」

「おつ、いいな！うし、じゃあネモン家借りるぜ！よろしくな！」

「うん！」

「あ、じゃあ金曜さ、僕の家でお泊まり会しない？お向かいだからすぐソコだし」

「それもいいなあ！いやあちようどハルトの家行ってみたかったんだよなあ！」

「うん、僕もペパーとボタン呼びたかったんだ」

「ハルトのお家はねー、いいとこだよー！お母様は優しいし、お庭も綺麗だし！」

「そーかそーか！そりや楽しみだ！……って、ハルト？お前、ネモとはお泊まりした事ある

のか……？」

「うん。何回だっけ？」

「3回だっけ？」

「なっ!?!お、女の子と、お泊まり経験済み、だとお……!?!こ、このふしだらちゃんたちめっ!?!」

「ふしだら?」

キヤツキヤと盛り上がる三人。勝負というより週末の楽しいイベントの様だ。トン
トン拍子で話が進んでいく。

おとまり。え、男子の家……ハ、ハルトの家に、お泊まり……?

ボタンは再び水を一口飲んだ。ちよっぴり室温が高い気がする。喉も乾いてきた。

「あ、あー、ウチあれね、今週は金曜無理だから。放課後から夜までリーグで奉仕活動」
カレーのジャガイモをスプーンでぽっぽっ割りながら、上擦った声でボタンは言っ
た。

視線はカレーに集中。決してハルトは視界に入れない。というか、入れられない……深
い意味は無いケド。

「じゃあ終わったら僕がお迎えにいくね」

「え」

スコン、とスプーンが空ぶった。ボタンは思わずハルトの顔を直視してしまい、慌て目を逸らした。じわじわと背中に変な汗が湧いてくる。

「い、いや悪いしいいって、時間も遅いし」

「だいじよぶだよ、ミライドンでひとつ飛びだもん。ねーミライドン?」

ニコニコ笑いながら、善意100パーセントでボタンを追い込むハルト。腰についている7つのボールのうちのひとつが、カタカタと楽しげに揺れている。間違いなくボタンの天敵である、あのペロペロトカゲの入ったボールだ。

「うぐ…」

ボタンは呻いた。ちよつびり顔を赤くして、唇をモノモノヨヨさせながら呻いた。

そ、そこまでしてウチを泊めたいんか…?ウチ女の子なのに…?あ、でもネモは何回も泊まってるんだっけ…?っていやいや、だからってウチまでホイホイ泊まる必要は…うう、でも友達にお呼ばれされんのは割と普通に嬉しいし…

「んじやあ決まりだな!俺たちは金曜の放課後ハルトん家集合!ボタンは夜から途中参加で、土曜の昼はネモん家で青空カレーパーティーだ!」

「いえーい!」

「あ、ちよつ!?!」

そうして長考している隙に、話は纏まってしまった。インドア派少女ボタン、まさか

の親しい異性の実家への外泊決定である。

「楽しみだねー♪」

「ポケモン勝負もしようねー♪」

「いや勝負すんのは俺とボタンだろー♪」

「「H A H A H A H A H A H A !」」

「ま、マジか……」

楽しげに笑い合う陽気な三人に、もはや水を差す事も出来なくなったボタンは、手元のカレー皿をただ見つめる事しか出来なかった。

本題である筈のペパーからの挑戦より、おまけのお泊まり会の方が気になって仕方がない。

「お、おとまり……ハルトと、おとまり……？」

慄きながらモソモソとカレーを食べ進めるボタン。香辛料のせいか、いやに汗をかいてしまうのだった。



そして、その日の放課後。学生寮にあるハルトの部屋で。

「なあハルト……」

「うん?」

「フイー?」

膝にエーフイのブイくんを乗せたハルトと二人、並んでベッドに腰掛けたペパーが、深刻な顔で相談を持ちかけた。

「…ボタンをギャフンと言わせられるカレーって、どんなだ……?」

「え……」

ハルトは二度三度と目をパチクリさせて、それから思わず聞き返した。

「…え、ええ!? 考えてないのお!」

「フイー!」

ブイくんも聞き返した。ハルトに背中を撫でられながら、目を丸くして聞き返した。ブイくんもあの時モンスターボールの中で、食堂での一部始終を聞いていたのである。

「ねえよお! 勢いと思いつきで勝負ふっかけちまったけど、俺なんのアイデアもねえよお!!」

「えええ!! それはちよつと大胆ちゃん過ぎだよお!」

「フイーフイー!」

「そうだよ大胆ちゃんだよお! 俺ちよつと大胆ちゃん過ぎたんだよお!」

うわー！つと両手で顔を覆ってしまおうペパー。彼は自分の無計画さを激しく後悔していた。ヌシポケモンの下調べをしていた時とは大違いである。

「バフツ」

そんな相棒の姿に、ベッド脇にのっそり座ったマファイティフは、呆れた様子でひと鳴きした。ペパーの耳は更に真つ赤に染まった。

「うう、どうすりゃいいんだ…あんだだけカレー好きなヤツがギャフンと言うカレーってなんだ…？」

指の間から目だけを出してため息を吐くペパー。脳内では自分の知るカレーのレシピとそのアレンジがぐるぐると渦巻き、さながらカレー鍋のごとくグツグツと煮詰まり続けていた。このままでは煮崩れ不可避である。

「ガラル系ならやつぱ普通にルーカレーだよな…ならここは王道にジャガイモたまねぎニンジン…いやまて肉はどうする何がいい…リングとかハーブも人気だったよな…うぐう悩むぞ通販でヤドンのシツポでも買うか…？」

「うーん…」

悩み続けるペパーを気づかいつつ、ハルトも考える。

「フイー…」

ブイくんも考える。両目をキュツと細めて小首を傾げ、シツポをユラユラさせながら

考える。

しかし、背中を撫でるハルトの手が心地よ過ぎて、いまいち思考が定まらない。

早々に諦めたブイクくんは、更に考え込むフリをしてハルトのふとももに顔を埋めた。愛する主人のふとももは、今日も柔らかでいい匂いがした。

「カレー、ルーカレー、カレールー……ルー、ルー、ルー……ルーといえば……」

完全に寝落ちしたブイクくんの寝息をふとももに感じつつ、うむむ、と右手を顎に添えるハルト。

もう少し、もう少しで何かが……

「ワフウウ……」

ペパーの足元のマファイティフが、大口を開けてあくびをする。

マファイティフ、やつぱりすごい貫禄あるよね……最初に見た時は弱り切ってたのに、スパイスを食べ続けたらすっかり元気に……

……ん?スパイス?

「……」

スパイス、スパイス、スパイス……!

「ピカンとききたー!」

「うおっ!?!」

「ンフィツ!？」

ハルトは膝のブイくんを抱き抱え、バツ!と勢いよくベッドから立ち上がった。隣のパパーが驚きの声をあげ、ブイくんはうたた寝がバレたのかと慌てふためく。

「ハルト? アイデアか? な、なんかいいアイデアが浮かんできたのか!? なあ!？」

救いを求めてハルトを見上げるペパー。捨てられたイワンコのような目に一瞬母性をくすぐられつつもぐつと堪え、ハルトは力強くペパーに頷き返した。

「うん! 僕たちにピッタリのナイスアイデアが浮かんだよ!」

「おお!」

「フイー!」

ペパーは涙を流して喜んだ。やはりハルトは俺の頼れるヒーローちゃんだぜ!と。

ブイくんも涙を流した。そしてすぐに前足で拭いた。やば、寝起きだつてハルトにばれちゃう!と。こつちはただの生理的な涙だった。

「ハイ、ロトくん!」

『ケテテ!』

必死に目をこしこしするブイくんを抱いたまま、愛用のスマホロトムを呼び出したハルト。スマホロトムは大喜びで彼のポケットから飛び出し、友であり主人でもある少年からの言葉を待った。

「何をするんだ?」

「えへへ、ちよつと電話!ロトくん、ネモにかけて!」

『ケテ!』

「ネモ?」

不思議そうに首を傾げるペパーを横目に、待つ事2コール半。スマホロトムの画面に、髪を下ろした部屋着姿のネモが映った。

『どしたのハルト?もうすぐ夜だから、勝負ならこつそりやらないと』
(いやこつそりもダメだろ生徒会長)

「ネモ!」

いつもの調子なネモに対し、ハルトは興奮した面持ちで、ぐいっと画面越しに顔を寄せた。

「又シポケモンって興味ない!?すつごいおつきくてすつごい強いの!」
『詳しくツ!』

爛々と瞳を輝かせたネモが、一瞬でどアップになる。ペパーは、ハルトの口から飛び出したワードに”かみなり”を撃たれた様に飛び上がった。

「ツ、そうか!カレーといえばスパイスで!スパイスといえば!」

「うんつ!」

パアツと笑顔を弾けさせたペパーに、ハルトはニツコリと満面の笑みを向けた。
そう！僕たち、俺たちが用意できる最強の食材といえば！

「秘伝スパイス!!」

ボタンをギャフンと言わせる最強カレー、秘伝スパイスカレー大作戦、開始だ！
……つづく!?

カルテットとカレーライス!後編

「アギヤーツス!」

「うおおおっ!?!」

「あははははっ!はやいはやーい!」

リーグ本部での罰則を終えたボタンは、迎えにきたハルトとともにミライドンの背中に跨り、初夏に差し掛かったパルデアの夜空を豪快にフライトしていた。

「風がきもちいいっ!」

「アギヤギヤ!ギヤース!」

頭から光のグライダーを生やしたミライドンが、おおはしやぎで夜空を飛びまわる。

エリアゼロでの大冒険でチカラと自信を取り戻したミライドンは、今日も今日とて絶好調。後ろ脚のノズルから轟々とジェットを噴射して、夜のパルデアを元気に飛びまわっている。そんな相棒の見事な飛びっぷりに、ハルトも大喜びだ。

「いいいいいいっ!?!」

だが、ハルトの後ろに跨るボタンは本気で死の恐怖に絶叫していた。

ハルトたち三人とエリアゼロの大穴に飛び込んだ時も相当だったが、今夜のフライトはそれ以上にスリリングでデンジャラスだ。全身に叩き付けられる激しい突風にイブイバッグの耳がバタバタとはためき、今にもちぎれ飛びそうになっている。

「ハ、ハルトー！ハルトー！スピード落としてー！」

「えーっ!？」

「スピードドー！ー！」

自分の前に座るハルトにぎゅつとしがみつきながら、風の音に負けない様必死に怒鳴りあげるボタン。

だが、残念ながら彼女の控えめな声量では、台風のように押し寄せる豪風を遮る事は出来なかった。

「スピードー!?!わかったー！ミライドン、ゴーツー！」

「アギヤツギヤーツー！」

「だあちがああアアアアツ!？」

少女の想いは全く伝わらず、二人を乗せたミライドンは更に速度をあげた。

グルグルと宙返りやバレルロールを繰り返しながら、大喜びで夜空を舞うミライドン。大好きなボタンとハルトを喜ばせようと、ウキウキ気分でアクロバット飛行をエスカレートさせていく。

「いやっほおほおっ!」

手綱を握るハルトは、まさに大喜びだ。しっかりと握られた二本の触角からハルトの喜びの感情がもりもりと流れ込み、ミライドンの胸が溢れんばかりの多幸福感で満ち満ちていく。

「ギャツオオオオッ!」

それがたまらなく嬉しくて、ミライドンは更に速度をあげてしまう。お調子者のテツノオロチは、愛するハルトにもっともっと褒められようと、無限にテンションを上げて続けていた。

そして、そんなミライドンがこれまた大好きなハルト少年も、相乗効果でよりテンションアップしてしまうのだ。

「やっふーうっ!」

「やっふーじゃないがああああっ!」

家々の優しい灯りと虫ポケモンたちの鳴き声が、なんとも温かく牧歌的な色を醸す夜のパルデア。その上空に、ボタンのゼンリヨクの絶叫がハイパーボイスの如く響き渡った。

「アギヤ?ギヤーツス!」

そんなボタンの悲鳴を歓声だと勘違いしたミライドンは、更にスピードアップ。より

アクロバティックな曲芸飛行で、パルデアの夜空を舞い踊るのだった。



ところ変わって、ここはテーブルシティから少し南に外れた場所にある小さな町、コサジタウン。名前の通り、ほんの小匙一杯ほどの大きさしかないこじんまりした町だ。

爽やかな木々と美しいオーシャンビューに囲まれたその町の、最南端近くの崖近く。潮の香りを含んだ優しい夜風が吹くその場所に、とある小綺麗な民家が建っていた。

可愛らしい花壇と瑞々しい菜園で明るく彩られたその家の、それなりの広さを誇る家主自慢の裏庭で。

「ふう、ふう……いいぞ、いい感じだあ……」

庭の景観にあまりにも見合わない巨大な鉄鍋を、これまた巨大な木製のオタマでぐるぐるとかき混ぜながら、ペパーは額の汗をぐいと拭った。

レンガブロックで手作りされた特製の焚き火台にかけられた、子どもの身長程もある特大の鍋。その鍋の中では、様々な具材がゴロゴロ入った超大量のカレールーが、ぐつぐつと小気味よく煮立っていた。

「よーしよーしよー……つと、パルシエン、頼むぜ」

「シャツッ!」

側に控えていたパルシエンが、ほんの少しの水を焚き火に吹きかける。ジュワツと白い蒸気があがり、火の勢いが少しだけ弱まった。今夜のパルシエンは焚き火の調節係なのだ。

「ん、サンキューな」

「シャッ」

「つてアツチイ!?!」

「シャツ!?!」

苦労様にパルシエンの貝殻を撫でたペパーが、あまりの熱さにビクツと飛び跳ねた。

焚き火の熱を至近距離で浴び続けていたパルシエンの貝殻は、つぼ焼きじみた高温状態になっていたのだ。

「シャーツ!」

愛する主人をケガさせまいと、慌てて冷水を吹き出すパルシエン。ペパーは遠慮なくヤケドした左手を差し出した

「うおおう、しみるしみる…うひゃあ、こりやママさんにヤケド治してもらわなきゃだぜ。はははっ、ばっかみてえ!」

みずタイプとこおりタイプ、ふたつの特性を併せ持つパルシエンが生み出すキンキン

の氷水が、ヤケドのキズにキリリとしみて中々に痛む。ペパーは可笑しそうにワハハと笑った。こういう思わぬハプニングも、屋外調理の醍醐味なのだ。

「応急処置完了！ありがとなパールシエン」

「シヤー！」

冷やした左手に手拭いをグルグル巻きにしたペパーが、パールシエンに礼を言いつつ再びオタマを手を取った、その時。

「うおっ!？」

ペパーの頭上を、謎の青白い電光が猛スピードで通り過ぎて行った。

「な、なんだあ?」

「シヤ?」

丸い両目を更に丸くしたパールシエンとともに、突如現れた空飛ぶ雷を目で追うペパー。

謎の光は、月明かりに照らされた夜の海原の上空を、くるくると輪を描く様に飛び回っている。

そして聞こえてくるのは、ペパーが子どもの頃から何度も聞いてきた、ハチャメチャに元気な甲高い鳴き声。

「アギヤアアス！」

「つてなんだよ、アイツかよ。ビビらせやがって、なあ?」

「シヤ〜」

崖の向こうで空中遊泳を楽しむミライドンの姿に、慣れた様子で苦笑するペパーとパルシエン。一見コワモテな風体の二人だが、その表情は空飛ぶ友人への親しみにゆるりと綻んでいた。

「ギャアアアアンスー!」

「つし、アイツらも到着した事だし、そろそろ仕上げるか! パルシエン、いいところで合図出してやってくれ。ボタンがへろへろちゃんになっちゃうからな」

「シヤツ!」

そう言つてペパーはカレーの仕上げに戻り、パルシエンは心得たとばかりに頷いた。

大きな貝殻を鞆の様に器用に弾ませ、崖側まで歩を進めたパルシエンは、上空に向けて青白く光る『れいとうビーム』を二度三度と撃ち上げた。ミライドンに帰還を促すサインだ。

「アギャ? ギヤス!」

合図に気づいたミライドンが、その場で大きく宙返りを決めてから、ゆつたりとパルシエンが待つ裏庭へと滑り降りてゆく。

「おーい!」

ミライドンの背中に跨ったハルトが、ぶんぶんと元気よく手を振っている。

「シャシャ」

ミライドンと同じくらい無邪気で疲れ知らずな友人の姿に、くすくすと笑うパルシエ
ン。

「オエエエエ…」

ハルトの後ろに跨っているボタンは、今にも吐きそうな顔でぐったりとしている。

「シャシャ…」

無尽蔵の子ども体力を持つ二人に振り回され疲労感マックスな友人の姿に、パルシエ
ンはあちやくくと貝殻をすくめるのだった。



無事に…とは言い難いが、とりあえず五体満足でハルトの家に辿り着いたボタンは、
もはや初めてのお泊まりに緊張する余裕もなく、リビングのソファに寝そべっても
わぬ置き物と化していた。

「あゝあゝ………」

「むちやあ?」

住人のひとりであるホシガリスが、物珍しそうにボタンの顔を覗きこんでいる。

「むちや」

その小さな手には、瑞々しいオレンの実が握られている。どうやらボタンに食べさせようとしているらしい。

そんなホシガリスを、ブラウンの髪をゆるりと纏めた優しげな女性が、後ろからそつと抱き上げた。

「だーめ、そつとしとくの」

「むちや?」

この家の家主の妻、ハルトのママである。

「もう、ダメじゃないハルト。女の子にこんな無茶させて。ねえ?」

「むちや!」

「あ、あはは……ちよつと楽しくなっちゃって、つい……」

ホシガリスを抱えた母にちくりと注意され、ハルトは気まずそうに頭を掻いた。あははと笑ってはいるが、口元は引き攣り目は泳いでいる。

「つい……そのついでウチは死にかけたんだが……?」

「うっ……」

メガネを外してソファに横たわったボタンが、グレーの瞳を細めてじつとりと見つめ

てくる。傍らに立つ母と、その母の腕に抱かれたホシガリスも、同じ様なジト目をハルトに向けていた。

「(ハ、ハ)めんない…」

頭頂部のくせ毛をしゅんと萎ませながら、もじもじと頭を下げるハルト。

『ギヤス』

彼の腰に下げられたミライドンのモンスターボールも、追従する様にカタリと揺れた。どうやら一応反省はしているらしい。その割に鳴き声は軽い響きだったが。

「まったくもう、ごめんねボタンちゃん？ハルトったら誰に似たのか、新しいお友達が出来たらいつも調子乗って舞い上がっちゃって。小さい頃もね？」

「へえ」

「ちよ、ちよつとママやめてよ！恥ずかしいよ！」

突然ボタンに自分の恥ずかしい過去を語り出した母に、ハルトは顔を真っ赤にしてワーワーと縋りついた。

ただでさえ恥ずかしいのに、聞かれる相手が仲の良い女の子と来れば、流石のハルトもいつもの飄々とした態度を崩さざるを得なかった。

「『ハルちゃんクチバシテイで待ち合わせなのー！』なんて言つて玄関飛び出してね？飛び出した一歩目で派手に転んじやつて『ハルちゃんしんじやうー！』ってもう泣くわ騒

ぐわの大騒ぎで」

「ママーッ!!」

「ぷはっ。なんそれ、ダッサ」

「あーもー! いろいろかーらー!」

火が出そうなくらい真っ赤な顔でワーワー叫ぶハルトの、珍しく狼狽しきったマヌケな姿に、ボタンはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた。

今こそ、さつきまでの所業の恨みを晴らすチャンスである。

「ふーん。学校ではいつもニコニコして、みんなの人気者くみたいな顔してんのに」

「な!? そ、そんな顔してないよっ!」

「ふふっ、ホントはお子ちゃまなんだ?」

「くッ!?!」

声にならない声をあげるハルトの顔は、いよいよ『だいばくはっ』を起こしそうな赤さになってしまった。涙目でワナワナと全身を震わせる小さな少年の姿に、ボタンの口角がニイツとあがる。

「かわいいでちゅねえ? ハルちゃん?」

「んなあっ!?!」

ニヤニヤ笑うボタンにトドメを刺されたハルトは、オクタンの様に真っ赤な顔で口を

ぱくぱくさせた。普段の無邪気ながらも大人びた自身たつぷりな振る舞いなど、もはや面影一つ残らず吹き飛んでいた。

そんなコイキング状態のハルトの元に、またまた新たな女性が現れる。

「お風呂ありがとうございますございましたー！って、なにになに？なんの話？」

髪を下ろしたお風呂あがりのネモが、ほかほかと湯気をたてながらリビングに入ってきて、ハルトはビクツと小さく跳ねた。

「あ、ボタンおかえり〜って私の家じゃないけどー！リーグのお仕事大変？へトへトだね」

「ん、仕事は全然。ハルトのせいでへトへト」

「ああネモちゃん、ネモちゃんも聞いて？ハルトったら」

ここぞとばかりにハルトイジリを再開する母とボタンに、少年のメンタルは完全に敗北した。

「あーっ、もうっ！お風呂入ってくるッ！」

ぶんすこー！と肩を怒らせてずんずん横切っていくハルト。ネモははて？と首を傾げた。

「どしたのアレ？」

「お子ちゃまが拗ねた」

「へ？」

「うふふっ！ほんとお子ちゃまで恥ずかしいわあ」

「むちやあ」

真つ赤な顔の少年が居なくなったりリビングは、女性陣の楽しげなクスクス笑いで溢れた。



「ぶう…」

「あつはつはつは！まあまあそう拗ねんなって、なあニヤオくん？」

「ハニヤ」

ハルトのママが腕を奮った豪勢な夕食を、集まった友人たちみんなで食べた後。

ハルトの部屋にあがったペパーは、ホシガリスのぬいぐるみを抱きしめてぶすつと頬を膨らませたハルトの隣に腰を下ろし、すっかりヤケドが治った大きな手でハルトの小さな頭をワシワシと撫でていた。ハルトの背中にべったりと抱きついて離れない、マスカーニヤのニヤオくと共に。

「ニヤ」

怒ったプリンの様に膨らんだハルトの頬を、ぶにぶにと突いて遊ぶマスカーニヤ。少

年の事が大好きなニヤオくんは、彼の拗ね顔も大好きな様だ。

「バフ」

ペパーの相棒であるマフイティフも、そんなハルトの珍しい姿を可笑しそうに眺めている。もはやこの家に、彼を面白がらない者は一人もいなかった。

「ほら、機嫌なおせよ兄弟。俺が明日、サイキョーに絶品ちゃんなカレー、腹いっぱい食わせてやるから。な？」

「ん…」

ハルトの頭に手を置きながら目線を合わせ、ニツと快活に笑うペパー。まるで歳の離れた兄の様である。

友だち付き合いを続けていくうち、互いに一人つ子なペパーとハルトは、自然と甘やかす兄と甘える弟、という擬似家族的なノリになる事が増えていた。そのノリは今夜も健在である。

「…喜ぶといいね、ボタン」

「ん？ ああ、そうだな」

ちよつとだけ顔の赤みが引いたハルトが、ぬいぐるみに口元を埋めたまま呟く。ペパーはハルトの頭をポンと優しく叩いてから、ごろりとその場に寝転んだ。

「ま、大丈夫だろ。お前とネモが集めてくれた食材で、この俺が料理したんだ。アイツも

きつと喜んでくれるさ」

「ギャフンって言うぐらい?」

「ギャフンって言うぐらい!」

「ふふつ、そつか。そうだね、みんなで作ったカレーだもんね」

コロコロと小さく笑うハルト。どうやら調子が戻ってきた様だ。背中に張り付いたニヤオくんも、嬉しそうに彼に頬ずりしている。やはりぶすつとした拗ね顔よりも、いつもの優しい笑顔の方が好きらしい。

「ねえ」

「ん?」

寝転がったままグイーっと身体を伸ばすペパーの隣で、ハルトもコロロンと寝転んだ。枕兼敷布団にされたマスカーニヤが、ニッツ、と鈍く呻く。

抗議する様にほつぺたをツンツンしてくるニヤオくんの手を撫でながら、ハルトは続けた。

「なんかさ、今回僕らだけですつごい盛り上がりつつあったけど、ボタンはどうなのかなって。ちゃんと楽しんでくれてるかな?迷惑じゃないかな?」ってさ、今更気になつてきちゃった」

「どうかな?とペパーに顔を向けるハルト。

「…そうだなあ」

ペパーはよっこらせと上体を起こし、胡座を組んでトントンと膝を叩いた。マフィタイプを呼ぶ合図である。

ノソノソと彼の膝に収まったマフィタイプの背中を撫でながら、ペパーは静かに語った。

「アイツからすりゃあ、そりゃまあ迷惑ちゃんな話かも知れねえけど…」

マフィタイプの温かい体温を感じながら、ペパーは天井を見上げた。

「…アイツさ、普段からあんま外にも出たがらねえし、メシも色々偏ってるだろ？多少ウザがられたって、俺たちがちゃんと注意してやらねえと」

まあ言つて聞く様なヤツでもないけどな？と笑うペパーから、ハルトは目が離せなかった。

「俺、今まであんま友達つていたことなかったらさ、正直よくわかんねえけどよ。ただ仲良しこよしやつてるだけじゃ、友達のやり甲斐もないって思うぜ」

そう言つてマフィタイプをそつと抱き寄せるペパーの横顔に、ハルトは思わず見入ってしまった。

複雑な家庭環境を持ち、パートナーを失いかけた経験もあるペパー。きつと彼は、身近な人がケガをしたり病気になつたりするのが、本当にイヤでイヤでたまらないのだ。

親しい相手だからこそ、不摂生には口煩いくらいに注意し、時には多少強引にでも振り向かせる。一見横暴な様にも見えるペパーの行動だが、それは全て彼なりの、大切な友人に対する深い親愛と思いやりの結果だった。

「やっぱりすごいね、ペパーって」

「ニヤフ？」

首に巻きつくマスカーニヤの腕にそつと頬を寄せながら、ハルトは目を細めて呟いた。

「ああ、僕の親友はなんて不器用で言葉足らずで、最高にかっこいい人なんだろう、と。楽しみだなあ」

物置でじつくり寝かせてある特製カレーと、件のインドア少女のまだ見ぬ笑顔に想いを馳せながら、ハルトはマスカーニヤの体温にゆったりと身を委ねた。

ペパーのぶつきらぼうなまごころが、ボタンのひねくれ気味な心にしつかり届く様、そつと神様にお祈りしつ。

「ニヤフ」

そんなハルトの白い頬に、マスカーニヤは優しくキスを落とすのだった。



少年たちがまったり穏やかに就寝前のひとときを過ごしている頃。

別の空き部屋に泊まる事になったネモとポタンは、並べた敷布団の上で色とりどりのブイブイたちと賑やかに戯れていた。

来客用の布団が見事に抜け毛だらけになってしまっているが、それを承知のうえでハルトのママはポケモンたちとの触れ合いにOKを出していた。ポケモン大好きボーイな一人息子と同じくらい、彼のママもポケモン大好きマダムなのである。

「ブイブイブイブイブイ！」

「んははははっ！」

「くすぐったいっしょ？」

「うん！ツンツンパチパチ！」

人懐っこくぶいぶい擦り付いてくるサンダースを抱きしめたネモが、硬く尖った静電気たっぷりの体毛に首元をくすぐられてケラケラ笑っている。

両膝に左右から頭を乗せてくるブースターとシャワーズのコンビを撫でながら、ポタンはネモのリアクションを楽しんでいた。

普段は中々に凸凹な二人だが、ポケモンたちを愛でている時は別の様だ。二人ともリラックスしきった表情で、個性的なブイブイたちとの触れ合いを楽しんでいる。

「リーファイア」

「フユ?」

柔らかい布団をふみふみと揉んで遊んでいたリーファイアが、ボタンの声になになにと耳を立てる。

ボタンがおいで、と両手を広げると、リーファイアは嬉しそうにボタンの胸に飛び込んだ。両膝のブースターとシャワーズが、撫でる手を止めた主人にムツと抗議の目を向ける。

そんな二匹の主張はボタンに届かず、ボタンはリーファイアの身体をぐつと持ち上げ、クリーム色の柔らかかなお腹にむぎゅつと顔を埋めた。

「すうー、はあー。すうー、はあー」

若草の様な独特の匂いを、胸いっぱいに吸っては吐き、吸っては吐く。

「あ、また吸ってる」

「はあー…ブイ吸いは淑女のたしなみだから。すうー…」

「フユウ…」

『なんだかなあ』と呆れた様子でされるがままになっているリーファイアの背中。きつとブイの頃から吸われ続けてきたに違いない。

「サンダース、ちよつと吸ってみていい?」

興味が湧いたネモが、胸の中のサンダースに尋ねてみる。

「…ブイツ」

サンダースはブイツとひと鳴きしてネモから離れ、ボタンの布団にモゾモゾと潜ってしまった。淑女のたしなみ、明らかに不人気である。

トレーナーとポケモンたちの間にある若干の温度差に苦笑しつつ、ネモは明日の一大イベントに胸を高鳴らせた。

「はあー。楽しみだねえ、明日」

そうネモが切り出すと、ボタンはリーフィアの身体を顔から離し、ぎゅつと胸に抱いた。

「楽しみって感じは、別に…」

「えー、ボタンドライすぎー」

ネモはぶーぶーと唇を尖らせた。

「私も頑張つて食材集めたのにー」

「プロテインとか?」

「ちがいますーっ!」

ボタンの茶化しにむっつ!と頬を膨らませるネモ。歳の割に子どもっぽい仕草が、髪を下ろしたパジャマ姿も相まってなんとも可愛らしい。

活発で頼り甲斐があるお姉さん、といった初見のイメージと相反する、どこか妹っぽい幼さと無邪気さ。

ネモ本人には言えないが、ボタンは彼女のこういった気質がなんだかんだ気に入っていた。

「ちゃんと食べられるヤツとつてきたん? 進化の石とかじゃなくて?」

「そんなワケなくない!」

故に、ついついこうして茶化してしまうのだ。ネモ相手なら好き放題言っても受け止めてくれると、無意識に彼女のおおらかさに甘えているのかもしれない。

「ふふ」

「もう…あははっ!」

クスクスと可笑しそうに笑い合う二人。周りのブイブイたちも嬉しそうに尻尾を揺らしている。部屋の隅っこにひとり寝そべったブラッキーだけが、ぶすつと無関心を決め込んでいた。

「ねえ、ボタン」

トコトコと寄ってきたニンフィアを膝に乗せたネモが、白い毛なみを撫でながら呟いた。

「ペパーの気持ち、わかってあげてね」

「え……」

思わずネモの顔を見るボタン。ネモはニンフィアのリボンの様な触角を弄びながら、何事も無かった様に柔らかに微笑んでいた。

「フィア？」

「ふふ、気持ちいい？」

「フイー♪」

歳上らしい包容力のある笑みで、ボタンの相棒を愛でているネモ。ご満悦な表情で彼女の胸に頬擦りしているニンフィアに、ボタンは小さく『浮気もの』と毒づいた。

「ブウ」

部屋の隅っこに寝そべるブラツキーが、小馬鹿にした様に鼻を鳴らした。全身に散らばる黄色いリング模様を、ほんのりと柔らかに光らせながら。



朝がきた。軽い朝食を済ませたハルトたち一向は、ネモの自宅の裏にあるプライベートビーチで、せつせとお昼のセッティングに勤しんでいた。

「よし、そこだ、オツケー！ありがとなキョジオーン！」

一晩寝かせた特製カレー入りの大鍋をしつかり運んでくれたキョジオーンに、ピシッとサムズアツプするペパー。

「ズズツ」

ゴツゴツした白い手で、同じ様に親指をあげるキョジオーン。無機質なつくりの顔面にはこれといって変化がないが、ぐつと立てた親指からは彼の生来の気の良さが滲み出ていた。

ちなみに、このキョジオーンの身体から採れた岩塩も、今回のカレーにしつかり使われていたりする。愛するペパー渾身のカレー作りとあつて、キョジオーンは大喜びで自身の塩を彼に提供したのだ。本当に気の良いヤツである。

「スコヴィラン、着火だー!」

「ボツ!」

ネモの家の使用人たちが用意してくれた巨大な焚き火台に、待つてましたと言わんばかりに火を吹き付けるスコヴィラン。質の良い焚き木がパチパチと音を立てて燃え出し、台に置かれた大量のカレーをまんべんなく温めはじめる。

凶暴な気質を持つハバネロポケモン、スコヴィラン。彼の身体からとれるハバネロエキスもまた、やはり今回のカレーにしつかりと使われていた。あまりに激辛過ぎる為、あくまでごく少量にはあるが。

尚、スコヴィラン本人は『どうせならもっといっぱい使えよ!』とかなり不満げであったとか。耐えきれずに昨日の調理中に暴れ出しそうになった彼をしつかり取り押さえたキョジオーンは、間違いなく今回の MVP である。

そんな彼らの隣では、ネモとボタンが大量の飯ごうにわっせわっせと米をセットしていた。

「私飯ごうつてはじめてなんだよねー。うーん、ホントにお米これしか入れないの? 少くない?」

「…炊飯器とか使わんの?」

楽しげに瞳をキラキラさせるネモと、若干めんどくさそうなボタン。控えめに発されたボタンの意見はさらりとスルーされた。

「お水お待たせ〜」

水の入った巨大なポリタンクを両手に持ったハルトが、ニコニコ笑顔でネモたちのもとへ歩いてくる。華奢な身体でゴツイタンクを軽々運ぶハルトを、ボタンは若干引いた目で見やった。

「ありがと! 重かったでしょ?」

「ううん、へーき」

ネモの労いにケロつとした笑顔を返しつつ、二つのタンクを砂浜に置くハルト。ドス

ンツ!と重い音が砂浜に響き、ボタンはますます引いてしまった。

「カントー人のフィジカルって…」

「うん?」

「いやなんも…」

「ハルト、水つてどれくらい?」

「えつとね、中指の…つて、まずは軽く米研ぎしなきゃ」

「「コメトギ?」」

経験者のハルトを中心に、わいわいと準備を進めていく飯ごうチーム。はじめは乗り気じゃなかったボタンも、気づけばそれなりにアウトドアを楽しんでいた。

(…:案外、悪くないんよな。リアルで友達と集まるのも)

スター団の面々との集まりとはまた違う、気の置けない友人たちとの戯れ。青空の下でシャカシャカと米研ぎをしているうちに、自然とボタンは笑顔になっていた。本題であるペパーとの対決などとうに忘れ、友人たちと過ごす休日の午前を、充実した気持ちで楽しんでいる。

「「こんなもん?」」

「うん。それくらいで一回お水捨てて、もう一回でいいかな。お米まで捨てちゃだか
ら、ゆつくり流してね」

「は？ムズ…」

おっかなびつくり、ちよろちよろと研ぎ汁を捨てるボタン。隣のネモも、そーつとそーつと、と唇を尖らせている。

「っし、できた」

「うん、じよーず」

「私もできた！」

「お米流さないでできた？」

「…えと、ちよつとだけ」

「あはは、難しいよね」

はじめての飯ごう炊飯に奮闘する二人と、二人を見守る先生役のハルト。

日ごろ周りから小さな子ども扱いをされがちなハルトは、珍しい自分のポジションにちよつぴりご機嫌な様子だった。



アウトドアクッキングに精を出す四人のポケモントレーナーたち。

待っている間手持ち無沙汰なポケモンたちは、綺麗なビーチを余す事なく使ってそれ

はもう元気いっぱいにはしやぎ回っていた。

「ミズズ」「ノココ」

「パモツ!」「ガルツ!」「バフツ!」

砂浜から素早く頭や尾を出したり引つ込めたりするネモのミミズズとノココツチに、ネモのパーモーツトとルガルガン、ペパーのマファイティフが、さながらデイグダ叩きの様にぴよんぴよんと夢中で飛びかかり。

「キーツ!」

「アギヤアアアス!」

「フューウツ!」

めいっばい翼を伸ばして軽快に空を飛び回るハルトのタイカイデンに追従する様に、背中にハルトのマスカーニャとペパーのヨクバリス、そして頭にボタンのリーフィア（日光をたくさん浴びているせいかわたらハイテンションだ）を乗せたミライドンが、澄んだ水面をジェットスキーの様な猛スピードで爆走し。

「フイーツ、フイーツ!?!」

「ブウーツ!」

「ブイー!」

「ブウ…!」

少し離れた浜辺では、くねくねした奇怪な動きでやたら素早く追いかけてくるネモのウエーニバルとペパーのリククラゲから、ハルトのエーフィとボタンのブースター、サnderース、ブラツキーがワタワタと逃げ回り（ブラツキーはものすごくダルそうだ）。

「シャワ…」

「シャア…」

「キュウ…」

「ヌムウ…」

そんな騒がしい一団からまた少し離れた浅瀬では、ボタンのシャワーズとペパーのパルシエン、ハルトのイルカマンとネモのヌメルゴンが、とろろんと身体をとろけさせ（シャワーズは文字通り溶けている）ながらのんびりと海水浴を満喫し。

「フイーア！」

「ボウ、ボウ？」

「クルル…」

その向かい側の岸壁の近くでは、ボタンのニンフィアとハルトのソウブレイズ、ルカリオの三匹が、やわらかい砂浜に仲良く腰を下ろしてガールズトークに興じ。

「ズズン」

「ボー…ボー…Z z z z z…」

そしてそんな三匹を眩しい陽射しからガードする様に、ペパーのキョジオーンがドツシリと側に座って日影を作っていた。暴れん坊なペパーのスコヴィランを腕に抱いて、その圧倒的な包容力ですやすやと心地よいお昼寝タイムに誘いつつ。本当に粋な漢である。

「…クル」

思い思いの相手と思い思いに楽しみ合うポケモンたち。彼ら彼女らの明るく純粹な波導をいっばいを感じとり、ハルトのルカリオがクスツと可笑しそうな笑みを漏らした。

「…ファイア」

「…ボウ」

お愛想皆無な全力塩対応がデフォルトな鋼のクールビューティーが見せた珍しい表情に、ニンファイアとソウブレイズが顔を見合わせてクスクスと笑い合う。

「…クンツ」

楽しさと嬉しさと親しみと、ほんのちよつとの揶揄いも含んだ二人の波導のくすぐったさに、ルカリオのリオちゃんやんはツンと唇を尖らせてそっぽを向いた。

トレーナーに似てちよつぴりいじけグセがあるリオちゃんやんは、イタズラ心に火がついた二匹にその後もしばらく揶揄われ続け、カレーの仕上げが終わったペパーの『ごはん

だぞー!』という大声が砂浜に響いた頃には、もう毛皮でも隠せないくらい真つ赤な顔になってしまっていた。

そんな彼女の反応にニンフィアはピョンピョンと激しく跳ね回りながらファイファイファイと喧しく萌え悶えまくり、ソウブレイズのカルちゃんは慌てて『ごめんね』と短剣型の手で彼女の頭を撫でさすった。たまに茶目つけを出してしまう事はあるものの、やっぱりカルちゃんは心優しい気づかい系女騎士なのだった。



焚き火台の側に設置された、ハルト愛用のピクニック用折りたたみテーブル。

普段は色とりどりのサンドウィッチで明るく彩られているそこに、スパイシーな香りをこれでもかと放つ四つのカレー皿がドンツ!と置かれる。

「おまちどうさん!ペパー特製スパシャルスパイススパシャルカレー、おあがりよ!」

「待ってましたー!」

「…スパシャルが過ぎるだろ」

姉弟の様に仲良く肩を並べて席についたネモとハルトが歓声をあげるなか、彼らの対面に座ったボタンは一人静かにツツコミを入れた。

「そんだけスペシャルだってこと!よつと」

そんなボタンの隣りの席にどかっと腰掛けるペパー。折りたたみチェアをぎつしと揺らし、自信満々な笑顔をボタンに向ける。

「ま、食ってみりやわかるぜ?」

長い髪を後ろで縛ったペパーの得意げな流し目にほのかな色気を感じ、ボタンはふんと鼻を鳴らしてそつぽを向いた。ペパーのくせに生意気だ、なんて可愛げのない意地を張りながら。

「う…」

しかし、明後日の方向に向けたボタンの視線は、目の前のカレー皿にみるみる吸い込まれてしまう。

ところが、しかし過剰にドロドロ過ぎでもない絶妙な塩梅のカレールーが、少しだけお焦げが混じった炊きたてごはんの上にとっぷりとかかっている。ルーには食べやすいサイズの野菜や肉がゴロゴロと、煮崩れもなくふんだんに盛り込まれている。思わずその楽しいな食感を想像してしまい、ボタンのお腹がぎゅうつとせつなく飢えを訴えはじめた。

そんな見るだけでも美味しそうなペパーのカレーだが、一番の衝撃はその香りだった。

ただでさえ食欲を刺激するカレー特有の香り。しかしペパーが作ったカレーの香りは、学食のカレーのそれとは桁違いに奥深くボタンの鼻腔と脳を支配した。

(なん、これ…辛いのに、ちよつと甘くて、コクがあつて、塩気もあつて、それでいてしつこい感じは全然なくて…)

まだ食べてもいないのに、匂いを嗅ぐだけで脳が美味しいと知覚しはじめる。生まれて初めて体験する異次元の絶香に、ボタンの空腹感はいよいよ痛みすら伴う程に上り詰めた。

もう、勝負とかどうでもいい。とにかく食べたい。食べたい。食べたい…！

「ぐくっ……」

泉の様に湧き出す唾液をぐくくと飲み込んだボタンの、ほんのりと上気したせつなげな赤ら顔。ボタンの対面に座ったハルトは、隣りのネモと楽しげに目配せしながらクツツと微笑み、ぱんつと両手を合わせた。

「それじゃあ、みんなで！セーのっ！」

ハルトの音頭に合わせて、待つてましたとばかりに手を合わせるネモとペパー。大量に敷かれたレジャーシートにずらりと並んだ四人の手持ちポケモンたちも、自分たちの前に置かれたカレー皿を食い入る様に見つめている。エーフィのブイくんなどは、鼻先を皿にくつつきそうなくらいに近づけてフーフーと激しく鼻息を鳴らしている。まだ

まだ精神年齢が幼いブイくんは、もう我慢の限界の様だ。

「……………」

一瞬反応が遅れたボタンが、慌てて両手をぱつと合わせる。口の前できゅつと合わせられた小さな手がどこか幼なげで、ネモとハルトは心の中でこつそりと萌えた。

——美味しい食べ物とそれに関わる全てのモノへ、心からの感謝を込めて。

「「「いただきまーすー!」」」

「…ます…!」

四人のポケモントレーナーたちは、待ちきれないとばかりにスプーンを手を取った。

『ケテテッ!』

…カシヤツ!



「んんんんーっ!んーひーっ!!」(訳:おいしーっ!)

相変わらず息びったりいなネモとハルトが、全く同じ仕草で全く同じ歓声をあげる。

「んんっ、んまいっ!んん、んんっ!!」

白いシャツを汗でびっしり濡らしたペパーが、感嘆の唸りもそこそこにガツガツと

漠らしく皿にがつついていく。

「フイーツ、フイーツ！フンツ、フンツ!!」

側のレジヤーシートからは、ポケモンたちの歓喜の鳴き声がワーワーと賑やか（ハルトのエーフィは特別喧しい）にあがっている。

「っ……っ……」

しかし、そんな周りの喧騒など、もはやボタンには全く聞こえていなかった。

「っ……っ……!!」

無意識に喉の奥から発せられる歓喜の唸りを、これまた無意識な押さえ込みながら、ひたすらスプーンを口に運ぶ、運ぶ、運ぶ。

「くっツツ……!!」

口を動かす度にカレーらしい辛みとコクが口の中に満ち満ちていき、程よい甘さと確かな塩気に絶えず舌が大歓喜。ほんのごく僅かに存在する絶妙な酸味が、次の一口への衝動を犯罪的に加速させる。パリパリのお焦げが混ざったやわらかなライスとホクホクでアツアツなジャガイモの甘みがルーの辛みとベストマッチし、味、食感、香りの全てで食欲を刺激し続けてくる。

（美味しい……美味しい……!!）

その味わいをガラル風に言うとなれば、文句なしのリザードン級。否、もはやそれ以

上の絶品。

(キョダイマックス……リザードン、キョダイマックス級……)

伝説の前ガラルチャンプ、ダンデが誇るキョダイマックスリザードンの勇姿を脳内に赤々と幻視しつつ、ボタンは湯気で曇ったメガネをテーブルに放り捨てて更にスプーンを加速させた。

「やつぱりすごいね、秘伝スパイス!」

「ああ、たまんねえ!くうくツ、ほんとにうめえ……!!」

「うん、うん!んーつ、頑張つてヌシと戦つた甲斐があつたなあ……」

キヤツキヤと味の秘訣を語り合う三人だが、肝心のボタンの耳には全く聞こえていない。

「ハニーミツもいい感じに効いてるよハルト!」

「ハルトがああのピークインと友達でよかったぜ!」

「えへへ。ネモがガラルのリング取り寄せたー!つていうから、ならやつぱりハチミツかなつて!」

「カエデさんがわけてくれたシナモンもいい香りだったよね!」

「それな!まさしく盲点ちゃんだったぜ!まさかパティシエールがカレーの手助けしてくれるなんてつてさあ!いやあオリーブオイルもすげえいいの売ってたし、近所のビー

クインは無敵のハチミツ女王ちゃんだし、なんかもうサイコーだなセルクル！引つ越すか！」

「あらあら〜！」

「ぶはははは！似てねーっ！」

あまりにも雑なセルクルジムリーダーのダブルモノマネにゲラゲラと笑うペパー。カレーの出来栄えとそれに伴う確かな達成感と充実感に、三人ともすっかりハイテンションだ。パクパクと大盛りのカレーを食べ進めつつ、和気藹々と盛り上がっている。

「ハイダイさんの調合レシピもすごかったよねー！」

「ね！メモ帳びっしりでわたしびっくりしちゃった！」

「あの人は神だ！香辛料の神さまだあの人は！正直今本気で弟子入りを考えている！」

「あ、浮気だ！サワロ先生にいつちやおハルト！」

「ロトくん先生にメッセお願い！」

「なっ?!おいやめろ！ダメだぞロトくん!？」

『ケテテテツ♪』

「うわソツコー送りやがったこいつ!？」

「あははははっ！」

勝負の事などすっかり忘れてはしやぎ合う三人。おしゃべりしつつも食べるペース

を落とす事はなく、むしろより楽しくハイペースに食事が進んでいく。親しい友達と食べる同じ釜の飯は、どんな高級料理店の逸品よりも美味だった。

「あれ、ボタンもう食べたの?」

「…っ、へ?」

突然ネモに名前を呼ばれて驚くボタン。本当に今まで何も聞こえていなかったらしい。それだけ無我夢中で食べていたのだ。

四人の中でいち早く空っぽになったカレー皿を見て、ペパーは一瞬キョトンと目を見開いてから、ニツといつもの様に得意げに笑った。

「美味かったか?」

「うえっ!?お、おう…うん…」

すぐ隣りから覗き込む様に笑いかけてくるペパーを何故か直視出来ず、もじもじと顔を逸らすボタン。いつになくいじらしいダウンア少女の姿に、ネモとハルトは目を見合わせてにつこりと笑い合った。

「どうやら、勝敗はほぼ決したらしい。」

「おかわりいるか?」

「う…じゃ、じゃあ…ちよつとだけ…」

「ん、ちよつとでいいのか?」

「うう……えと、あの………な、並盛りで……」

「おうっ！」

そつぽを向きながらおずおずと差し出された皿を、満面の笑みで受け取るペパー。おかわり用の飯ごうからもりもりとライスを盛りつけていく彼の横顔を盗み見るボタンの顔は、正しく牡丹の花の様に赤らんでいた。

「……大成功だね、ハルト？」

そんな二人を優しげな目で見つめつつ、そつとハルトに耳打ちするネモ。ハルトはボタンのいじらしい照れ顔にほんわかと目を細めながら、『うん』と満足げに頷いた。

「ほい、おまちどさん！」

「ん……さんきゅ……あ、あの、ペパー……？」

「なんだ？」

おかわりが盛られた皿に手をつけず丸メガネをかけ直したボタンは、躊躇いたつぷりにペパーへと身体を向け、真っ赤に染まった顔でもごもごと呟いた。

「……ぎゃふん……」

上目遣いで囁く様に絞り出された、か細い声。二人を見守るネモとハルトが、声に出さずに『キヤーツ！』と悶える。

「はっ！」

(ずこっ!)

ポカンとした顔で首をかしげたペパーに、姉弟は揃ってずっこけた。このにぶちんちやんめっ!とペパー風に胸中でツツコミながら。

「ツ……だ、だからっ!」

察しの悪いペパーにちよっぴり声を荒げつつ、ボタンはボソボソとペパーに敗北を宣言した。

「…ギャフンって、言ってるの。そういう勝負つしよ…ウチの負けだよ…ペパーのカレー、ほんとに美味しい…こんなに美味しいの、はじめて食べた…」

気恥ずかしさを必死に堪えながら、正直に言葉を絞り出したボタン。

「……っ?」

ペパーは呆けた顔で再び首を傾げながら、数秒ほど無言でボタンをぼーつと見やり。

「…あ、そうか!…そういう勝負だったなコレ!」

ぼんっ!と納得した顔で手を打った。

「…は?」

「いやーすっかり忘れてたぜ!…そうだそうだ勝負だ勝負!カレーが絶品ちゃん過ぎて頭から吹っ飛んじまった!」

ヒクツと口元を引き攣らせるボタンに構わず、ケラケラと楽しげに笑うペパー。対面

に座るネモとハルトは、両手で口を押さえて必死に笑いを堪えている。

「はははは！にしてもお前、ギャフンって！マジでそのまんま言うヤツがいるかつての、なあ!？」

「うぐう…!?!」

「いやに真つ赤な顔でどうしたのかと思つたら、ちっさいちっさい声で『ぎやふうん

…』って」

「『ぶふっ!!』」

「おっ、おい！ウチそんな言い方してないし！人がせつかく恥ずいの我慢して!？」

「恥ずかったのか?」

「恥ずいだろ!」

「ぎやふうくん」

「あはははははははっ!!」

「くっくっくっ!？」

真つ赤な顔でぷるぷると震えるボタン。今にも”だいはくはつ”してしまいそうだが、自分は敗者であるという意外にも潔い意識が、彼女に幾許かの我慢強さを持たせていた。スター団を束ねるマジボスとしての、最後のプライドなのかもしれない。

「なあボタン」

「なんだよ……もう……」

ひとしきり笑い終えたペパーに名前を呼ばれたボタンが、いじけた様にカレーをパクつきつつ懺然と返す。

そんなボタンのむすつとした横顔に、ペパーは右手で頬杖をつきながら笑みを送った。

「今日はいいいからさ。明日からは野菜、ちゃんと食べよ」

「……ん……」

「カレーもな。ちゃんと来週まで我慢、だぞ?」

「……ん……」

「美味いか?」

「……………美味しい」

「へへっ。そっか!」

たくさん食べよ!と快活に笑い、ペパーは自分の皿に山盛りのおかわりを盛りつけにいった。

「フイー!」

「お、ブイクンもおかわりか?」

「ブウ!」「シャウ!」「ブーイ!」「フユウ!」「フイーア!」「…ブウ」

「お前らもか！トレーナーに似てカレー狂いだなあ。よしよし、待つてろよー今順番に…」

「ファイー！ファイー！ファイーファイー！」

「つて待つてつつつてんだろつまみ食いすんなこら！めっ！」

空っぽの皿を可愛らしく口に咥えたブイブイたちにもみくちやにされながらギャーギャーと騒ぐペパー。ハルトのエーフィもボタンのブイブイたちも、不思議とペパーにはよく懐いていた。なんとあのクール&ドライな一匹狼系男子、ブラツキーまでもが、である。

「やっぱりペパーつて…」

「うん…」

カレー鍋に顔を突っ込もうとしたエーフィの首根っこをとつ捕まえて、薄紫色の頬をむにいーつと引つ張つてガミガミと折檻しているペパーを眺めながら。

「オカンだよねえ」

仲良しチャンピオン姉弟が、可笑しそうにそう笑い合つた。

「…オトンかも」

「へ？」

「ボタン？」

「あ、いや、その…」

ぼろ、と漏れたボタンの眩きに首を傾げるネモとハルト。

ボタンは、厳しく優しくブイブイたちと戯れているペパーの広い背中を見て。

「…なんでもない」

ふふ、と穏やかに頬を緩めた。

「…ありがと、ペパー」

おしまい。



(今日も今日とて休日になりリモート会議…腹減りました…)

(…む？スマホに通知…この写真、カレーですか…カレー…)

(……………)

「トツプ」

『なんですかアオキ。会議中ですよ』

「腹減ったので今日はあがります」

『ダメです』

「トツプ」

『ダメです』

「トツ」

『ダメ』

「……」

「ト」
『ダメ』
おしまい。